2012年2月28日発行

ニュースレター News Letter

No.30

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

開所10周年記念号

・キリスト教と文化研究所の「これまで」と「これから」
所長　帆苅　猛

・開所１０周年を迎えて
学院長（初代所長）　森島牧人

・１０年の活動・成果
実践教育・歴史研究・倫理研究・文化研究

・講演会・刊行物・ホームページ

キリスト教と文化研究所の「これまで」と「これから」

所長　帆苅　猛

「キリスト教と文化研究所」が、かつての神学内にあった「プロテスタント研究所」をリニューアルする形で発足して10年になる。学部に属さず、各学部から所員が集まって研究活動を支えるという点で画期的であった。そして、研究活動も、所員それぞれの関心に合わせて研究グループを結成し、自主的に研究活動を進めるという点でもユニークであった。

それから10年経た現在、2つの研究プロジェクト、6つの研究グループ、3つの委員会と組織的には大きく発展してきた。ただ、予算的には年々厳しい状況になっている。そうした状況を打開し、研究成果を上げていくために、村椿前所長の時代に、予算を全体に平均して分配するのではなく、特定のプロジェクトに重点的に援助し、それによって短期間で成果を上げてもらう方向に変わった。

おそらく、今後も基本的にはこのような方向を取らざるを得ないのであろう。ただ、こうした方向を押し進めていくと、息の長い研究がすすめられなくなるのではないか、という懸念も生じる。一方では、少ない予算と人材を集中して、特定の研究に集中し、できるだけ早く成果を挙げることも重要であろう。しかし他方、さまざまな所員、研究員がそれぞれの興味や関心に合わせて、幅広いテーマで、息の長い研究を続けることも大事であろう。この両者を何とか折り合いをつけながら研究を進めていくことが大きな課題である。

また、本研究所は、関東学院大学の建学の理念とも深くかかわっている。そのような研究所である以上、研究を進めていくことはもちろんであるが、学生の教育の場においても貢献していくことも大切であろう。そのような教育の場で用いられていくことにこそ、本研究所の真の意義があるのではないかと思う。

開所10年を迎えて

学院長（初代研究所長）　森島　牧人

２００１年10月13日に発足しましたこの「キリスト教と文化研究所」も、早いもので開設10周年の時を迎えました。これまで当研究所に寄せられました、多くの方々からのご支援ご協力に感謝申し上げます。当研究所の創設期に関わったものとして、三つのことを述べたいと思います。

(1) 神学部附置「プロテスタント史研究所」の後継教育研究機関として

１８８４年10月６日、「横浜バプテスト神学校」として山手の地に産声を上げた関東学院は、今年創立１２８年を祝います。キリスト教の牧師養成校として始められた学校でありましたが、その歴史の中で二度にも亘り、神学教育機関としての役割を断念してまいりました。いま神学部の復活は至難としても、私学の特殊性、特色ある大学やＵＩ（University Identity）が叫ばれる中、キリスト教に基づく教育機関を謳う関東学院として、この部門の確立は、本学院の存在意義を再確認する上での必須な要件でありました。本研究所が、神学部附置「プロテスタント史研究所」の後継機関として創設された所以であります。

(2) 大学附置研究所として、「と」の原理にこだわって

現在我々が託されている教育と研究の業に関しても、急ピッチで進む世界のグローバル化に対し、"Integration"という方向性の上に大学教育の目標値を据える必要性を強く感じています。諸科学の統合力的効果に価値を求めるからです。諸科学が求め、大学が与えてきた学問は、たとえ同じ領域にあってもお互いが理解できないほどにテーマが専門化し、細分化の一途(differentiation)を歩んできました。もちろん教育研究機関である以上、これを否定する必要はありません。むしろ第一義的使命でありましょう。しかし、極度にグローバル化しつつある今日の世界にあっては、大学教育の持つもう一つの方向性が必要とされていると言えないだろうか。つまり、細分化した知の再統合。それは、「共に生きる力を育む」というこの現実的なテーマの下に、今我々が持ち得る個々の知を最も価値高く統合する、知恵への希求とも言えましょう。

(3) グローバル化に向けた世界に「対話と連帯」を求める研究所として

この観点から、本学がいま、他者と共に生きる奉仕教育への参加を通じて、人間としての自己の可能性を見出し、人に仕える意味を理解し、社会の構成員としての責任感を構築できるとするならば、それは大学が提供する諸科学を、日常生活の上でもっとも価値高く統合（integration）する、人間力教育を実践していることになりましょう。この勇気ある実験データーこそ、実社会、否！世界へとリンクできる大学がもつ、新しい指標となるものではないでしょうか。

その意味で、いま当研究所が取り組みつつある研究プロジェクトの一つ、奉仕教育を切り口にした国際理解、つまり地球上の限りある資源の内を共に生きる力を涵養するものとしての奉仕教育の確立と、地球上に存在する数多くの人々と共に生きるための力を体験を通して育む「サービスラーニング」の展開とは、今日、関東学院大学が校訓「人になれ　奉仕せよ」に示される学院のモットーを世に指し示す時の、喫緊、且つ最重要な課題であると言えましょう。

最後になりましたが、皆さま方の上に、主の御祝福が豊にありますようにお祈り致します。また、これらの研究所の諸活動をお覚え頂き、今後ともお支え下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。

実践教育研究 ―「人になれ、奉仕せよ」を伝えるために―

校訓の求める「奉仕」の精神をいかにして涵養していくことができるのか。このことは本研究所に託された重要な課題である。奉仕活動・ボランティアは現代社会における大きな教育課題でもある。本研究所では以下のグループ、プロジェクトを中心にこの課題に取り組んできた。

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ（2001～）

奉仕・ボランティア教育のあり方を追求している。

これまでに、私立中学高等学校における奉仕・ボランティア実施状況、および奉仕・ボランティア意識の形成に関するアンケート調査、中学高等学校教科書に見られる奉仕・ボランティアについての記述分析、学校現場で指導に当たっている教員からの現場報告を通して、現在の奉仕・ボランティア教育の実態調査を進め、報告を行った。

これと並んで、奉仕・ボランティアの視点から見た関東学院の教育の歴史の研究、奉仕・ボランティアの理論的研究についても進めている。

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト（2005～）

国際サービス・ラーニングの理論・実践研究を行ってきた。

2010年度まで、タイ北部山岳少数民族への支援活動を通して、民族や地域を超えた文化のあり方を、人間の生き方として考える研究を進めた。支援活動については、現地教会組織ACT、関東学院大学シグマソサエティ（学生組織）と連携して、教会堂兼シェルターを年1棟ずつ計5棟の建設、サービス・ラーニング・プログラムの準備を行ってきた。本年度からは中国・雲南省へと対象を移し、調査活動を進めている。

主な関連報告

(1)「奉仕・体験学習・ボランティアの教育と実践について―アンケート回答の集計と報告―」高野進他（所報1号）

(2)「教科書に見られる奉仕・ボランティア活動」高野進他（所報2号）

(3)「奉仕教育と体験活動について－福祉教育・ボランティア学習の理念と実践」伊藤隆二（所報4号）

(4)「キリスト教学校高校生の奉仕・ボランティア観と実態について」影山礼子（所報6号）

(5)「奉仕教育における実践的研究序説―関東学院国際サービスラーニングへの試み―」森島牧人（所報2号）

(6)「タイ北部山岳少数民族の自発的発展に関する一考察」菊地昌弥他（所報5・8号）

(7)「タイ・ビルマ国境山岳地帯におけるキリスト教受容の一事例」勘田義治（所報7・8・9号）

タイ北部での支援活動

歴史研究 ― 関東学院の源流を捉え直す ―

関東学院を支える歴史を問い直すこと、それは現在の自分たちに課せられたミッションを捉え直すことに通じる。以下の2プロジェクトを通して歴史研究を進めた。

「バプテスト研究」プロジェクト（２００４～）

旧「関東学院大学・日本プロテスタント史研究所」の研究遺産を受け継ぎ、関東学院大学の伝統であるバプテスト派に関する神学的・歴史的研究を進めてきた。

研究成果は、「バプテストの歴的貢献（２００６）」および「バプテストの宣教と社会的貢献（２００９）」という研究叢書として出版した。

また、２００７年度より、「バプテスト教科書刊行プロジェクト」を進め、２０１１年に「見えてくる‐バプテストの歴史」として刊行に至った。

現在は、共同研究グループとして研究活動を進めている。

「坂田祐研究」プロジェクト（２００４～）

中学関東学院の初代学院長であり、本学の建学の精神「人になれ、奉仕せよ」の制定者である坂田祐の人と思想について、研究を進めている。

坂田家より寄贈された「日記」を解読・デジタル化し、順次報告している。

これとともに、関連資料のデジタル化を進めており、坂田祐の東京帝大卒業論文「預言者エレミヤ」については、所報掲載に至った。

また、坂田祐の生涯に関わる事績について、外部講師を招いての研究会を行うとともに、坂田が青年期を過ごした足尾（２００７）、父祖の地である会津への現地調査も進めた。

主な関連報告

(1)「バプテストの水戸・平伝道」大島良雄（所報４号）

(2)「日本バプテスト婦人達の宣教活動に関する歴史的研究」原真由美（所報５・６号）

(3)「第二次大戦後の四谷教会」古谷圭一（所報６・７号）

(4)「『坂田祐日記』解読」坂田創（所報３号～）

(5)「不老倉から足尾そして陸軍教導団へ―足尾での坂田祐調査を中心に―」帆苅猛（所報６号）

(6)「捜真女学校と坂田祐」小玉敏子（所報８号）

(7)「預言者エレミヤ」（東京帝国大学卒業論文）坂田祐（所報７・８・９号）

坂田祐研究プロジェクトの会津調査

文化研究

― 現代・日本においてキリスト教とは何か ―

「キリスト教」は様々な社会的要因、文化と相互に関わりながら存在している。日本の中で「キリスト教」がどのように受容されてきたのか、そして現代社会においてどのような作用をするのか。多面にわたる課題を「キリスト教と日本の精神風土」研究グループと「依存症とキリスト教」研究プロジェクトを中心に検討してきた。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ（２００１～）

日本の精神風土との関わりで「キリスト教と文化」の問題を考える活動を進めている。日本におけるキリスト教の受容、仏教との比較、日本人および日本の国家とキリスト教の軋轢、靖国問題など多様な課題について、研究会を開催してきた。

また、本研究グループより「坂田祐」研究や「依存症とキリスト教」研究プロジェクトが立ち上がった。

「依存症とキリスト教」研究プロジェクト（２００７～）

「依存症」および「依存症社会」の構造と特質をキリスト教の観点から分析し、解決のための手段を探ることを目的としている。

現代日本社会は、「依存症社会」になってしまい、それに伴う障害や問題が多数発生していると捉えられる。本プロジェクトでは、その回復のために、特にキリスト教に基づく12ステップ方式による自助グループの活動の外部展開を検討してきた。その成果は、所報５～９号で発表してきた。

主な関連報告

(1)「仙台拠点の地方伝道地・塩釜」大島良雄（所報１号）
(2)「植村正久における『キリスト教と日本の使命』」帆苅猛（所報２号）
(3)「キリスト教徒から観た原始仏教思想の特質と課題」三井純人（所報４号）
(4)「キリスト教から見たｅｓｔの問題点」神谷光信（所報８号）
(5)「依存症社会論序説」安田八十五（所報５・６号）
(6)「神の存在及び三位一体説の数学的証明」安田八十五（所報８号）
(7)「精神的落ち込みの解釈学的分析」田代泰成（所報９号）

研究所で開催された研究会

倫理研究

―現代社会における「いのち」を問う―

「いのち」はすべての人間にとって重要なテーマである。現代社会において「いのち」にどのように向き合っていくのか、「いのちを考える」研究グループを中心に、この課題に取り組んでいる。

「いのちを考える」研究グループ（２００１～）

「いのち」の問題について、多様な専門領域および経験をもつメンバーで学際的な検討を行っている。

「いのち」にどのように向き合っていくのか、という問題は、先端医療が発達し、臓器移植や末期ケアのあり方が問われる現代における重要な課題である。自己決定権、基本的人権、キリスト教倫理などの視点を含めた議論を行ってきた。

それとともに、「いのち」のリアリティがどのように得られていくのかという問題について、検討を進めた。人間環境学部の授業に参加し、学生との意見交換を通して、大学生が「いのち」に「出会う」道を探った。２００８年度には、大学生の「いのち」に関する意識と実態のアンケート調査を行い、さらにインタビュー調査を進め、「いのち」の認識に主要な要素を検討した。

主な関連報告

(1)「いのちに関する自己決定権についての一考察」三浦一郎（所報３号）

(2)「『いのち』を考える教材と授業実践」安達昇（所報３号）

(3)「大学生に対する『いのちを考える』授業実践」大豆生田啓友他（所報４号）

(4)「大学生のいのちに対する認識とその規定要因」鈴木公基（所報９号）

2001 年 10 月 13 日の開所記念講演会にて
隅谷三喜男先生と小川圭治先生

2012 年 1 月 14 日の公開セミナー
「東日本大震災のその後に向けて」

公開講演会・セミナー・シンポジウム

研究所では、各研究グループ・プロジェクトによる研究会、勉強会が多数行われており、その一部は一般に公開されている。

それとともに、年数回の公開講演会・シンポジウム・セミナーを開催している。これは大学内外を問わず広く公開しているものであり、その内容は研究所所報やニュースレターにて報告するとともに、ビデオ資料として研究所に保管している。

開催日		講演等内容 【主な関連報告】
2001	10/13	（講）（開所記念）日本社会とキリスト教 【所報 1(p.111), NL2】
2002	10/23	（シ）いのちを考える—21 世紀の生と死 【NL4・5】
2003	11/ 8	（シ）坂田祐と関東学院 【所報 2(p.68), NL7】
2004	1/12	（シ）関東学院における奉仕教育 【所報 3(p.113)】
2005	10/19	（講）奉仕教育と体験活動 【所報 4(p.35), NL13】
	2/17	（講）坂田日記を読む - 関東学院の歴史と当時の世相 - 【NL14】
2006	10/28	（講）バプテストは今なお、バプテストか？ 【NL15, 叢書 1 号】
	3/10	（セ）共に生きるために—国際理解とボランティアを考える— 【NL17】
	3/17	（シ）依存症とキリスト教
2007	6/23	（講）校訓『人になれ奉仕せよ』の先がけとして —坂田祐の祖父日向内記と父中村富造の生涯—
	10/29	（講）あの時の気持ちで伝えたいこと
	2/9	（シ）外から見た日本—タイと日本の共通点と相違点— 【NL18, 19】
	3/22	（セ）精神科医から見た依存症の本質と対策 【所報 7 (p.21)】
2008	7/1	（セ）ルワンダ大虐殺から 14 年
	3/21	（講）キリスト教はなぜ日本に根付かないのか？
2009	10/17	（シ）バプテストの伝統を持つ研究機関の現在的教育使命 （学院創立 125 周年、バプテスト 400 年祭記念） 【所報 8(p.53)】
	10/24	（セ）水と人との関係 - 多様な水環境と人間の関わり - 【NL25】
	3/13	（講）遠藤周作の世界—母なるキリスト教—
2010	10/30	（シ）国境を越えて行きかう人・物・金 【NL28】
2011	3/4	（シ）坂田祐先生と祖父・白虎隊隊長日向内記の思想と行動 【NL26】
2012	1/14	（セ）東日本大震災のその後に向けて 【NL29】
	3/17	（シ）環境問題から見た東日本大震災の意味とキリスト教の役割

（講）講演会、（セ）セミナー、（シ）シンポジウム

【 】内は主な関連報告：所報 : 研究所所報、NL: ニュースレター 数字は各号数

定期刊行物

キリスト教と文化研究所所報

（1～10号）

所員、研究員の研究成果を発表する紀要集として、2002年より年1回発行しています。研究論文、研究ノート、研究グループおよびプロジェクトの活動報告を収録しています。

ニュースレター（1～30号）

広く一般の方へ研究所の活動を紹介する冊子として、年3回発行しています。内容はホームページにも全文掲載していますので、御覧ください。

出版

「バプテスト」研究プロジェクトの成果により、以下の3冊の書籍を上梓しています。（関東学院出版会　発行、丸善　発売）

「バプテストの歴史的貢献」
バプテスト研究プロジェクト編（松岡正樹・影山礼子・村椿真理・原真由美）
（2007年3月発行）

「バプテストの宣教と社会的貢献」
バプテスト研究プロジェクト編（村椿真理・佐藤光重・影山礼子・古谷圭一）
（2009年10月発行）

「見えてくる - バプテストの歴史」
出村彰　監修・バプテスト史教科書編集委員会　編著（2011年5月発行）

ホームページ

研究所ホームページは2002年に日本語版、2006年に英語版を開設し、随時更新しています。以下のコンテンツを掲載しています。

- 研究グループ・プロジェクトの活動報告
- 講演会等の予定（What's New）
- ニュースレター（全文PDF式）
- 研究会および講演会の映像記録

http://kgujesus.kanto-gakuin.acjp

Office

金沢八景キャンパス　フォーサイト7階
「キリスト教と文化研究所」内

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

〒236-8501
横浜市金沢区六浦東1－50－1
電話：045－786－7873（研究所直通 月～金曜 10：00～16：00まで）
FAX：045－786－7806（研究所直通 24時間受付）

発行者：帆苅 猛
Director: Takeshi Hokari